

笑わない少女



尾崎孝爾

「笑わない少女」

留学から帰り、札幌市内の大学に勤める宇佐美圭吾は趣味のスケッチのため、蘭越町に旅行に
来た。宇佐美は数々の豊かな自然に魅了されるが、とりわけ図書館に掲げられた不思議な少女
の絵画に心を奪われる。やがて宇佐美は少女が実在することを知り、探し求めようとするが。。。

夢を見る。

空に浮かぶ、一羽の渡り鳥。

フワフワ、フワフワ、日差しが柔らかい。

翼を小刻みに調整して丁寧に浮かぶ。

風が、身体をツヤツヤと通り抜ける。

風は私の教え子だ。

全てがありのまま、全てが清々しい。

まるで海に浮かんでいるみたい。

青い空、蒼い海、境目なんてあるのだろうか。

地平線に目をやる。おんなじだ。空も海も同じ。どっちも深く、広くそしてひたすらに自由なのだ。

だけど、少し寂しい。

だって私の他には誰も見当たらない。

寂しい。

もつと飛ばなければ。

もつと高く、高く、

もつと低く、低く、

墜落するように！

そうしなければ。

孤独は大嫌い。

自由過ぎるのはもつと嫌だ。

大きく翼を鞭打ち、旋回しよう。

ああ、だけど何て気持ちいいんだ。

これはいったいなんなんだろう。

いったい夢を見ているのか、それとも夢見心地な気分だけなのか。

分からない。何もかも全てが分からない。

どうだっていいじゃないか。ただただ気持ちがいいのだ。

だってここなら、夢は現実そのもので、現実も夢そのもので、だから、そんな議論は全部、無意味で、そしてこの世界は甘美なのだから。

ふと思う。

渡り鳥はどこから飛んできて、どこへ向かうのだろう。

一説によれば遠くアラスカから季節とともに北海道に降りてきて、徐々に南下していくのだという。

そうであるならば、渡り鳥にとって、湖一つ一つはきつとその場限りの存在に過ぎない。その場限りの存在、一度きりの存在、だからもう二度と思い出すことはない、幻のような存在なのかもしれない。

そんな刹那的な生き方をしてる動物は、よほど神経質に違いない。些細な出来事には繊細、日々のありふれた日常には鈍、だから彼らはとても不器用に違いないのだ。隣を見ると一羽の純白の鳥がいる。とても美しい鳥がいる。

きつと私の終生のつがいに違いない。良かった、私は一人ではなかったのだ。彼女はいったい今、何を考えているのだろう。

わからない。

しかし、分からないからこそ、魅了されるのだろう。そういうものなのだろう。

「——間もなく、蘭越、蘭越です。お降りの方は一番先頭の扉からお降りください」

瞬間、目の前がフラッシュバック、明るくなった。

私は現実に戻された。そう、私の夢は終わったのだ。

ほら、圭、起きて——そんな声が聞こえた気がする。

私は隣の席に座る茉耶にゆすり起こされた。

そうだ、私は婚約者の茉耶と旅行を楽しんでいるのだったけか。重たい眼をこすり、ようやく頭が回り始めた。

この辺りは山に囲まれた地帯のせいか、ワンマン運転のこの小さな汽車はプラモデルのオモチャのようにグングンと身体を揺らして、登っていく。私の耳元で茉耶はワアワアと話し立て、私を夢から引きずりおろしたのだ。そんな状況を把握した。日差しはほぼ真横から来る。無粋なやつでちよつととした瞼の間から入ってくる。すると夕方か。

「すまない、茉耶、ちよつと疲れていたようだな。君が隣に座っているのに、寝てしまうようでは。君との大切な時間がまた失われたようだ。」

私は最近忙しい。

東京の大学院で化学を専攻し、博士号を取得し、直ちにイギリス留学が決まった。

その後、私は札幌市内の大学勤務となり、そこで有機化学を学生に教えた。これはまた、私にとつて願ってもない厚遇だった。

有機化学は非常に良い。

私はもともと絵のデッサンが大好きで、それが高じて構造式をひたすらに「描く」学問、有機化学を専攻したのだ。構造式は筆跡鑑定のようなもの、その人の心がわかる。逆れば、錬金術に端

を発するそうだが、構造式はその人の営みだに見えてきそうなプロセスである。手先は構造式に注がれ描かれ、それと同時に人の想いも注がれていくのだろうか。そんな不思議な気持ち私の背中を鳥肌立たせた。

「そうつまり、もう言い訳はできないけど、蘭越での休暇は君とできるだけ長く過ごそうと思う。もちろん、仕事のことは一切考えない。これは本当だ。」

私は茉耶に言い訳をした。もともと大学の研究者に暇などない。彼らは時間外労働を平然とこなす。当たり前である。彼らは自分の趣味を仕事としてしまった人たち。余暇も仕事も同じことである。

しかし代償は大きい。今、私が茉耶からお叱りを受けているように、辛い時もある。男は辛いのだ。

ああ、また寝てしまいたい。茉耶のことは愛してる。しかし、茉耶が何を言っているかを理解する前に、眠りにもう一度就く前に、辺りの景色は動くのを辞した。つまり、汽車は止まった。

私たちは急いで汽車から降りた。

駅前はずほど大きくは無いが、北海道内には多い小さな落ち着いた無人の駅だった。あたりを見回す。スーッと息を胸腔内に送り込む。空は抜けるように雲がなく遙か遠く、山際に少しばかりのイワシ雲があるばかりである。高い建物は無く、このまま、この場所で寝そべって一晩明か

したら、どれだけ綺麗な天然プラネタリウムになるだろうと想像した。この町には、東京には無いものがあるのだろう。都会人は往々にして、田舎に憧れる。これは不思議な話では決していない。欲望のつぼは人の集まる場所だからこそよく攪拌され反応し、不特定の顔の無い人たちが徒党を組んで大きな顔をするようになって、だから都会は短絡性にあふれているのだ。田舎は満たされないことだらけだ。だが、それが翻って健全な精神を生むのではないか。これ以上はやめておこう、説教好きな老人にはなりたくないし。

ふと、イギリスの田舎の田園風景を思い出した。東京の山手線から見る車窓に比べるとオアシスのような景色だった。果てしなく続く農村地帯、放牧牛、コロコロした藁の固まり、これらは全て田舎的な記号性を有する。しかし、蘭越町とイギリスの田園景色はまるで異なる。イギリスは決して豊かな土地ではない。キングズクロス駅から北上する電車から見る田園景色は皆一様に樹木に貧しく、草木も伸びが悪い。イギリスは緯度が高く、降水量が少ないためである。おそらく尻別川からの肥沃な大地の供給があるためであろう、この町は照葉樹林が所狭しと生い茂り、平地に生える雑草も背が高い。鉄道の線路は草原をそこ退け、そこ退けと切り開いたかのように、あたりは何も無い。ああ、そうして草木たちが精一杯光合成して造った酸素は私が今吸っているのである。私は自然と一体化したことを実感できた。

すこし不安になることもある。やはり田舎特有の連帯責任的な風潮があるのだろうか、挨拶はきちんと出来ないことやより良くないのだろうか。世の中には往々にしてどうにもならないこと、ど

うしても避けられないことがある。実際、私が駅ののぼり階段を見るとその「どうしようもない事実」が広がっていた。蛾がたくさん散っている。これが田舎のデメリット、というやつなのだろうか。どうしても虫が好きになれない。昔、東京の大学で学生の指導をしていた時、フラスコにゴキブリが入っていたことがあった。触れるのも嫌なくらいだったが、1人の女学生は難なく捕まえていた。そういう人を見ると羨ましいと思った。都会の子供は虫取りを幼少の頃からしない。というか、するのはテレビゲームの画面の中でしかしない。つまり、したことがない。普通、生き物の飼育に触れることで養われる情操教育が欠如してしまうのだ。これは由々しきことではないだろうか？まあしかし、今更変える気にはならないなあ、と自分の虫嫌いを正当化してみた。何事も無根拠な前向きさは重要だ、と考えている。

駅を出て、町の土に触れる。遠くのほうに連峰が見えた。山は樹木で着飾っているためか、空との境界がとても柔らかく見える。樹木が太陽光を吸収、反射しているためなのだろう。その下に隠れる尾根の容姿もよく見て取れた。それだけにリアル、それだけに人為的工作の入っていない山。これが本物の自然なのだ。東京では決して味わえない自然。ふと、東のほうは特に山が目立つ。なるほど、これはシヤクナゲ岳、チセヌプリ、ニトヌプリ、ニセコアンヌプリとやらなのだろう、どれがどれだかは分からないが。とても特徴的な山がある。まるでお化粧をしたような山。どうやら雪ではないようである。石灰成分でできた、イワオヌプリだけは木がまったく生えてない。少し異質に見える。彼は

他の山と仲良くやっつけていけているのだろうか、少し不安になった。イワオヌプリ、覚えておこう。ここに来る直前に羊蹄山も見てきたが、いずれも非常に綺麗な形の山ばかりだ。山の形はその性格を印象づける。裾広がりや山の山が多ければ、いかにも懐の広そうな性質に見えるし、樹木が生い茂っていればそれは奥深さと優しさを感じさせるようにも思う。しかし、人が不機嫌になるように山もその性質を時々刻々と変える。羊蹄山は今や赤々と染め上がり、人々の顔を赤色に浸していく。赤、危険信号、交通事故、ポイント・オブ・ノーリターン。夕方、黄昏時、昼と夜の境目。私たちは様々な情報を山から読み取ることが出来る。それだけ山が深いということなのかもしれない。とにかく、色々なことを想像してしまう、それゆえに深淵。

仰角を下げてみると、見渡す限り、辺りは稲穂が垂れ、小麦色に光る。夕方に着いたせいもあるのだろう。一緒に降りた住民に少し尋ねると、国道5号線が見える。数百メートル先まで見渡せる。話を聞くと、この町はお米が良いそうだ。そしてこの国道を境に地質とか稲の育成環境が違ふということらしく、なるほどふむふむと肯いてみた。意外かもしれないが、北海道でも米はとれる。

駅から少し歩いてみると、閉店セールをする店が見える。昔の蘭越を少し想像してみた。たぶん、ここも以前はたくさんさんの若者が通っていたのだろう。たくさんさんの学生がここを通り、母親に見送られ都会に行き、誰も帰ってこないのではないか。忘れられているのかもしれないが、この駅前でも随分たくさんさんの出来事が起こったに違いないのである。それは時には誰かの素敵な思い出の

場所だったに違いないし、時には厳しい現実を突きつけられることも多かったのではないか。私の目には、駅のホームから過ぎ去る電車が見え、それを駅の外から見送る母親の姿が見えたような気がした。そんな場面があってもおかしくないのだ。私は未だに呼吸している和菓子屋に足を運んだ。すぐ駅前にあるのだ。この店もこの町を何年も何年も見守ってきたに違いないのである。店の先はT字路になっていて、人っ子一人歩いていない。とても運転しやすそうだ。車を呼んで、宿泊先まで送ってもらおうかな。

夕方のたそがれ時、私は茉耶と共に車に揺られ、ただただ景色を楽しみ、それに溺れる。こんな時間はいつぶりだろうか。私が忘れていた、まどろみ、十代からの甘い誘い、優しい記憶、醜さのかけらも覚えていない。まさに白昼夢。私はこの時間が永遠のものであれば良いな、そう思った、月並みに。そんな私の心を見透かしたのか、懐かしい曲が耳に入る。町全体に響く警報という名の音楽。

ドヴォルザーク交響曲第九番「新世界より」。私はしたこともない、虫取り少年としての自分、朝顔の日記をつけた自分、学校の先生に挨拶して勇み足で帰宅する自分をそこに見た。私は唐突に蘭越の小学生になったのだ。そして18時の合図が終わった。

人は得てして、意味付け、動機付けを行いたがるものである。生物は合目的に造られているとよく言うが、神は心の中に宿るのと同様に、根拠には乏しい。痕跡器官も合目的、とでも言うの

だろうか。見た目に捕われていては正しい結果は得られない。逆に、見た目とは相反する意外な観察ができると、おや、と思ひ印象に強く残る。私たちが泊まるこの幽泉閣もそうした意外性を持った建物である。ヨーロッパの建築に多そうなオクタヘドラルな中央部分にクリーム色の車だしの屋根がついている。ただ、西洋風にしては高さが足りないようにも見えるのが特徴的だ。一階立てではないだろうか。実際には温泉施設であり、全く外観からは予想できない。宿はこの幽泉閣で予約してあった。なんでもこの温泉は有名らしいのだ。男湯に入ると、色々な種類の浴槽があった。まず、ジャグジーのような三十九度の湯船につかると、美肌効果がすぐに分かった。肌がすぐにつるつるとし始めたのだ。これはアルカリ性の温泉だと考えればすぐに納得が行くことである。面白くなり、次に露天風呂や滝のように流れる変わった湯を浴びてみた。露天で話を聞いていると、蘭越町では七つの湯の源泉があり、ここはその一つだという。別の場所にある温泉は建設業者の社長が趣味で始めたものがあるらしく、格安だと聞かされた。昔、ソ連の地理学の教科書を読んだことがある。それには日本は温泉で政治活動や民衆の集会を行うのが一般的であると描いてあった。それは言い過ぎにしても、温泉で人と話し、その地域の話聞くのは格別に楽しいことだと感じた。湯船で視界が閉ざされているせいも、それとも熱い湯に入ることでは酔い気分になるためか、少しばかり口が緩くなるのではないかと考えた。私は実は、旅先で道行く人に話かけるのだが大好きである。飛行機で隣の席になった人に話しかけるのも好きである。仲良くなると写真をとらせてもらったりする。一度きりの思い出だからというか、一期一会

というか、そういうことは大事なのではないかと思う。温泉を出て脱衣所を抜けると、何十畳かの畳の間でテレビを見ながらくつろげる。ちょうど写っていたのは演歌「津軽海峽冬景色」。近くに牛乳瓶が自動販売機で売っている。牛乳を瓶で飲むなどいつ以来だろうか。確かに小学生の給食は瓶だったかな。この温泉にはそこかしこに、やはりというか、知りもしない懐かしさがあふれていた。

実は私はここで、ある先生にお会いすることになっていた。茉耶を宿に行かせ、私は温泉の湯冷ましをしながら、この町の貝類博物館の市川先生をお待ちした。

「宇佐美先生、ようこそおいで下さいました。」

実は蘭越でちよつとだけ仕事があるのだ、茉耶には内緒で。市川先生とは大学時代の旧友で、彼に短期間でこの貝の館なる博物館で特別講演を行うことになっている。一日数時間といったところなので、茉耶に怒られることはない、はず。市川さんとは明日からの講演会に向けて詳細を詰めることになっている。高校生対象、ということで、出来るだけ優しい言葉で説明できるようにしなくてはならない。内容的には「海洋天然物化合物における複雑多様性」について語るつもりだが、これだけでは何のこっちゃだから分かりやすくする。しかし誤解を与えないように、だ。これが難しい。

「市川さん、例えば、ある一つの化合物について細かく話すのはどうかなあ。」物語を作り出す、というのは予想以上に大変だ。「確かに興味深い海の化合物はたくさんあるけれど、全部を話し

たら、時間がいくらあつても足りないし、聞いている学生さんたちは何が何やらさっぱりになつちやうんじゃないですかね。」たとえば、とつさに嘘をでっち上げたとする。「どんな海洋物質でも人工合成できると言い切つてしまつてから、細かい内容に移るのはいかがでしようか。」嘘はその場しのぎには何とかなるだろうが、やがて綻びができて、それを修繕するために再び吹聴しなくてはならない。やがて矛盾に満ちて違和感バリバリの巨塔が出来上がるのだ。「それじゃあ、あとでネットで調べた時に反論されそうですよ。いけません。有機合成には限界があるじゃないですか。」もちろん、嘘をつくわけではない。聴衆が持つ前提知識と演題の有する発展的知識を秤に載せ、必要な情報を取捨選択する必要がある。「北海道の学生さんなのだから自然とはよく触れ合つてゐるはずですし、海についていいよねつていう感じの話から、海にはいろんな物質があつて、そのうちのいくつかを紹介します、という流れが分かりやすいのではないでしようかね。」すべてを聞かせ伝えることは全くあり得ない。だから、聴衆の持つ知識の一段階から二段階上あたりを想定して物語を展開するのがベストだと思われる。この少しだけ上を行く感覚が重要だ。市川さんとの議論も終わり、夜も更けた。

これなら明日からも大丈夫そうだ。そう確信しながら、寢床に就いた。そう、全ては万事うまくいく。

翌日、私は急いで講義に向かった。何せ、私は忙しいのだから。

朝は市川さんが迎えに来てくれた。車中。

「この町は花畑もすごい力を入れてるんですよ」

なるほど、言われてみるとそのようだった。マリーゴールド、日日草、あとは何だろうか、あまり詳しくないので分からない。

なぜ草花はかくも綺麗に見えるのだろう。千年も前のヨーロッパなら、これは神の御業だから当然綺麗なんです、とかいつて説明したのかも。でも、そうではないだろう。網膜にある色感受性の錐体細胞がバランスよく多様な吸収波長に対して興奮するから脳に良い刺激を与えるからかな。そういうことは無い気もした。理由なんて分からない。そう、世の中、不可解なことだらけなのだ。

「みなさんは天然物、という言葉聞いたことがあるかな？天然物というのは実は自然の生命が作り出す有機物質のことを言うんだ。この博物館でも展示されている貝たちもそうした天然物を自分の身体で造っているんだ。たとえば、シガトキシンという物質がある。この物質はとてもユニークな名前をしているけど、実は巻貝シガから来ているんだ。」

講義は問題なく進んだ。予想通り、高校生のちょっと上を行く戦術は大成功だったようなのだ。細かい物性情報を提供するのではなくて、複雑な構造式を見て、これは何かな？あれは何かな？と疑問する、ワクワクする心、そういった猫にも似た好奇心が学生たちに芽生えたように見えた。

一人の女学生が、一つの質問。質問されるというのは、実はかなり嬉しいのだ。

「先生―。ちよつといいですか。」

蘭越ではあまり見ないタイプかな？と思った。背は高く一六五センチくらいありそうだ。髪は染めておらず、ポニーテールでまとめてあり、腰の上まである。顔は全体的に丸く色白、目はパツチリとして大きい、眉は太い。唇はやや細めで特に顎が特徴的。化粧は控えめといったところか。全体的に意志の強さと独立心旺盛さを見て取れた。物腰は柔らかく大人な態度をとることができ、一方で瞳には子供心を同居させるという思春期特有の矛盾を感じた。

彼女は東さんと言った。

彼女は実にたくさんのことを聞いてきた。

「何なら、この後、花一会図書館に行くから、一緒に行きながら話そうか？」
などと答えてしまったのが全ての始まりだったわけである。

分かっていたのだが、彼女はある種特有の「何々？教えて、教えて、もつと教えて！」症候群の一人だったのだ。つまり何でも聞こうとしてきた。

「へー、先生って彼女さんいらつしやるんですねー、どんな人なんですか？」

「今度、先生に勉強とか教えてもらいたいんです」

「先生は札幌ではどんな授業やつてるんですかー」

そろそろ疲れてきたころには、ようやく図書館が見えてきた。

蘭越で最も目立つのではないかとも思われるこの西洋風の館。木造だが、青空色に塗装された壁は潔白さと柔和さを感じさせ、天気の良い日は、空と一体化した空間のように見えた。この花一会図書館は学生の集う場所でもあるのだ。

「東さんね、今日は先生は図書館でビブリオバトルというものを見に来たんだ。」

「へー、なんですかそれ。試験に出ますか。」

「試験勉強には関係ないね。本を紹介する企画というか、そんな感じだよ。良ければ、聞いて行つたら？」

「そういうことなら、私は今度の機会に聞きに来ますねー。」

実は私は依然より書評合戦ビブリオバトルの聴講者なのだ。札幌市内でも、もちろんよく参加した。特に図書館サークル Sapollo という大学サークル主催の去年度のバトルは激熱だったな。

ビブリオバトルとは五名程度のバトル（本の発表者）がそれぞれ持ち時間内に本を身振り手振りで紹介して、一番読んでみたい本を決定する大会のこと。最初は大きく面白く無いんじゃないかと思つたが、茉耶に誘われて行ってみるとい案外楽しいのだ。ありがとう、茉耶。

「あ、宇佐見じゃないか。」

やあ、これは図書館長もとい、佐藤。彼は私の大学時代の旧友で同じく大学院に進んだのだが、

途中で中退してこの図書館長を勤めるようになった。本当に彼も色々会ったようだ。まさか北海道で会うとは全く思っていなかった。以前からメールでコンタクトはとっていたのだが、彼も元氣そうで何よりだ。眼鏡は相変わらずの今風の細い黒ぶちの楕円眼鏡がよく似合っている。スーツ姿のためだろうか、私よりも随分まともなように見える。彼は私より大学時代からずっと真面目だったが、というよりも彼は継続する力があつた。私は、どちらかというところがあつたが、彼は違つたように思う。大学の弓術部の同期だったが、彼は私より遙かに長い間所属していたし、それなりの蓄積に裏打ちされた自信と実力がある。大学を卒業する時、仲間内で十年後はいつたいどうしてるんだろうな、とよく話し合つたものである。私は生涯、友達と呼べる人間は存外に少なかったように思う。考え過ぎかもしれない。他人をそんなにやたらと約束で結びつけること自体間違っているのかもしれない。それにしても、懐かしい。

「今日はどんなビブリオバトルになるのかな、佐藤。」

「結構、いろんな人が各地から来たみたいだよ。そこに座ってるパトラーの彼女なんか、ほら、東京から来たみたいだよ。」

ふと、指先を見つめると見覚えのある女性だった。

彼女は確か――

「深川さん、久しぶりですね。」

とてもよく覚えている。彼女と私は実のところ一回しか会つたことがない。彼女とは東京行きの

飛行機でたまたま相席になって話が弾んだのだ。小松空港からの飛行機だっただろうか。空港の待合室でも目立つ女性だった。細くてモデルのような体型をしており、要するに紙のよう。ペラペラしているのだ。肌の色は健康的な白さを保っており控えめな黒のブラウスを着ていた。目立つなあと思っていたら機内で話が盛り上がって、キャビンアテンダントに注意されたような気がする。相席になって初めて彼女の顔が分かった。

眉は細く頼り無さげ、髪は肩までセミウェーブ、上目遣いがうまい。しかし、手はやや大きめでこれまで多くの困難を自力で克服してきた強さも感じた。要するに要領の良い子供じみた我がままさを持つ女性というふうに写った。彼女は確か大学でドイツ文学専攻だったはずなので、本を紹介するということは――

「もしかして車輪の下、ですか。」

深川さんはびつくりしたのか、恥ずかしいのか、そういうサインを出すために顔を両手で包み込むようにしながら髪いじりを始めた。

「実は、そうなんですよね。ばれちゃいましたか。テヘ。」

頭をコツンと自分でやる。私にやってくるのは、なかなか良い度胸だ。以前会った時に読書好きなのは聞いていた。「私、小中高とあんまり友達とかいなくて、それでどうしようかなって思っただけ時間もたくさんあったから本を読もうかなって」と言っていたのだ。とりあえず仕草についてはスルーしておこうか。

「でも宇佐見さん、本当に久しぶりですねー。お会いできて嬉しいです。」

「いえいえと軽く挨拶して、「ところで、なんでこの町でバトラーをやることにしたんですか。」

「ちょうどスキーマのシーズンも近いですし、下見に来ようと思って、ですね。蘭越町って札幌からもアクセス良いじゃないですか。それで札幌市内でビブリオバトルのポスターを見て、観光がてら来てみたんですよー。」

「そういえば、スキーで一度北海道に来てましたよね。」

「蘭越町はパウダースノーで有名ですからね。」と佐藤。

「ともかく、深川さんの発表楽しみにしてますね。」

深川さんの発表は三人目だった。ビブリオバトルは全ての発表を聞かないと実は投票権が無い。だから1人目の発表者は陰が薄くなるため意外と不利になる。発表スタイルは各々自由だが、カニングパーパーは使ってはならない。

「unterm Rad。とても簡単なタイトルですよ。私が初めて手にとった時、車輪の下には何があるのかとても不思議に思いました。この『車輪の下』という表現は実は作品の中で実際に出てくる表現なんですよね。本にはこう描かれています。主人公が校長先生に諭される場面で――」

深川さんはかなり原稿を考えてきているタイプのようだ。実は最も理想的な発表とはしつかりと原稿を考えてくる優等生タイプではなく、その場でぎくばらんに話すようなフランクな感じが好まれると言われている。これは意外なようにも感じるが、バトラーの生の感想を聞くことが出

来る、という聴衆と発表者の間に生まれるある種の臨場感から来るものである。本来、発表した
い本に造詣が深いのであれば、何の原稿も無くてもスラスラと言えなければおかしいのだ。だが、
それ以上に重要な理由として、ビブリオバトルは本の面白さを競うのであって、プレゼンテーシ
ョンのうまさは評価外、というのがポイントなのだ。だから、むしろ頭を使わずに一般的な人た
ちにも分かる言葉、雰囲気で発表した方がうまく行くということらしい。もつとも、五分という
短い制限時間の中、自分の言いたいことを全部言い切るにはもちろん、原稿を用意したほうが良
いに決まっている。私がバトラーをやる時は原稿を覚えてくる。それは本質的にもしバトラーの
発表の善し悪しに関係なく本が選ばれるのだとしたら、圧倒的に有名な本、誰でも読めそうな安
直な本ばかりが上位に入って当然、ということとは誰の目にも明らかであり、発表する前から既に
勝負は決まったのも当然ということになるからだ。やはり、発表は重要だと思われる。学術的な
発表でも同じような内容の議題でもプレゼンターが巧みであれば、とても深い話に聞こえること
もある。以前イギリスの研究所での発表だっただろうか、始まると同時に突然壇上の中央に歩み
寄り、腕を大きく広げ、大統領の演説顔負けの発表を見たことがある。彼は、序論は控えめなト
ーンでゆつくりと話しかけたが、クライマックスになるにつれて声を大きく荒げ、聴衆の興奮を
煽った。そういう発表の方が聞いていて飽きないし、面白いのだ。もちろん山師のような人間も
巧い。ともかく、こういう技能はビブリオバトルに限らない。とても重要なテクニクなのだ。
「皆さんは心が強いですか？そもそも心が強い、とはどういった状態なのでしょう。私は心が

強いかわいさかというのは、その人の性格のことを指しているのではないかと思ひます。性格は急激な変化と成長を伴う十代を境に緩やかに変容していきまゝから、生まれつき心の強さが決まつているように決めつけるのは間違つてゐると思ひます。そう、人は変わるのです。どのような時に変わるのでしょうか。他人にいつさい耳を傾けずに動揺せず、我が道を歩む人もゐると思ひます。でも、多くの場合、手引きしてくれる尊敬できる人がゐるからできるのだと思ひます。何かを信じてゐることができるとはとても重要です。私も自分の彼をととても愛してゐますし、信用してゐます。この小説の主人公は周囲からの期待を一身に受けてギムナジウムでギリシャ語やラテン語の勉強をします。これはとても献身的ですね。自分のため、というよりも周りの人たちの期待を損なわせないため、という優しい心の持ち主です。でも、これは諸刃の剣ではないでしょうか。彼らは本当に少年にそこまでの期待を真剣に持つてゐたのでしょうか。彼らが四六時中彼のことを考へてゐたとしてもゐるのでしょうか。人とはとても優しい存在にもなりえますが、時として我がままで忘れつぽいものです。何も考へずに言つた言葉が他人を左右することもあるようですが、じゃあ全ての発言に責任を持つていかなきゃな、と思ふような殊勝な人間は滅多にゐません。周囲の人たちの期待に答えれば、将来が約束されるのでしょうか。違ひますね。ギリシャ語で「評価をとれば、前途有望でしようか。それもあり得そうにないです。全ては学校という小さな箱庭、人間社会の縮図といへども、所詮は井の中の蛙。ですから、少年はきつと学校で眞面目に勉強するのがつまらなくなつたのでしよう。少年は自分の幸せ、自分らしい幸せの在り方を

他に求めることが出来たに違いなかつたのです。でも、結末はあまりに悲劇です。こうした物語はありふれたことです。でも、それを小説という文脈に書き直した時、それは人々から評価され、注目されるのです。結局、普通の人間ならば、ある程度周囲から評価を受け続けなければ腐ってしまう、というのは得てしてあるわけですから、そういう意味でなかなか生きていくというのは難しいもののような気がします。幸い、現代の若者にはこうした悩みはあまり多くないように思えます。彼らは情報化社会の申し子、鈍感力には優れているはずで、彼らはたくさん情報を受け取ること慣れきっています、一方でそこから効率的に情報を選び取ること非常に長けていると思います。これは私の先輩の言葉です。『受け取った情報からどれを重用視するかは権利だ。しかしながら、そもそも情報を受け取ろうとしないのは罪に値する』と。」

「なかなか面白いバトルだったね、宇佐見。」

佐藤は上機嫌だった。ええ、と適当に相づちを打つ。蘭越でビブリオバトルが開催出来るなどなかなか無い。佐藤ほどのめり込むことはできないが、有意義な時間だったと言える。深川さんは準優勝だった。他の発表者たちもなかなか。

「個人的には、あの、シヤケ武士さんの発表が面白かった。」

「あ、あの鮭についての生態観察の本。」

「ああいう本は中々に無いよ。鮭の生態や行動学にももちろん言及しているが、シヤケの解剖か

ら分子細胞生物学におけるモデル動物としての利用についてまで言及しているじゃないか。面白い。」

「ナノスケールからマクロな領域まで鮭のことについて系統的にまとめてあるのが興味深いというだね。なるほど。」

佐藤が目を眩しそうにしながら言った。夕日がまぶしくなってきた。

そして、いよいよ幽泉閣に戻る時間が迫ってきた。学生たちもそれぞれに帰宅する時間だ。きつと家では誰かが夕ご飯を作って待っていてくれるのだろう。お祭りが終われば人は帰る。そのあとに残るのは喪失感ばかりだ。お祭りは開催中が最も華やかだが、実際には準備期間が一番楽しい。準備中では、本番はどうなるだろうか、こうしたほうが良いのではないか、などとあれこれ自由に思索に耽ることが出来る。人は可能性が広がっている方が楽しいと感じる。お祭りの大きな仕事はこうした人に夢を売ることにある。しかし、いざ終わるとあとは片付けばかりだ。夢の片付け。活気はなくなり、現実へと戻る扉。人は皆背中を向け、背中を屈めてそれぞれの現実に戻り、一時の歓喜は嘘のように瓦解する。この図書館もまさにその「解散」の時を迎えようとしていた。聴衆の彼らには一体いつになったらまた会えるのだろうか。もうたぶん会わないだろうな。少し話かけてみたほうが良かったのかな。私は不思議な寂しさを感じる、ある種の興奮にも似ているのかもしれない。脈は大きく鳴き続けて体幹では暖かいのに、指先は冷たくフルフルとふるえる。これが武者震いというやつなのだろうか。

随分と「お祭り」に依存してしまつたようだ。

花一会図書館はカウンターの前で聴衆を見送っていると、大きな時計盤が目に入った。とても大きい時計盤、秒針は音も立てずに連続的に動いている。とても興味深い。私はすぐに外の暑さにさらされたくないがため、時計盤を眺めることにした。

——チツクタク、チツクタク。

あたりは静寂で時計の歯車の音しか聞こえない。

秒針がスーッと這うようにして動くさまは、とても心地よくも不気味だった。それは生き物ではありえない何かを示唆しているかのように思えた。本当は知らないだけで、こんな動きをする動物がいるのかも。そう思うと何だか不安になった。

——チツクタク、チツクタク、チツクタク、チツクタク、チツクタク、チツクタク。

もうこの時計盤は見えていられない。

私は目を跳ね散らした。何かないか、何か、あればよいのだが。

何か、私に変化をもたらしてくれる物があれば良いのだが。

その時だ。私には見えた。私は感じた。画廊に飾られた一枚の絵画が私を呼んでいる。私は逃

げるように、獲物を捕まえるように慎重に素早く目を向けた、足を動かした。

その絵は、およそ全てが充足された絵だった。

少女の絵だった。

ただの少女の絵ではなかった。そこには世界の全てが凝集されているように感じた。少女の顔を忘れることができない。少女はたぶん白人だ。金色の少しだけ起伏のある透けてしまいうような髪は肩までかかる。眉は細くほつれかけた金色の刺繍のように弱弱しい。唇は薄く、その割にほっぺは少し弾みがあり丸い。瞳はむしろ青白色というよりは金茶を帯びている。真っ白の少女は椅子に腰かけ、華奢な身体を斜めに向けていた。白磁のような白い腕からウェーブのかかった柔らかな肩の曲線が目に入った。それが純白のドレスから潜り抜けていた。私はこれを見たことがある、と感じた。オモチャ売り場で見ると女の子向けの人形にそっくり。しかしリアル。あまりにリアル。

「なんだこの絵は。。。」

私は、少女を見てすぐに激しい不安を覚えた。鳥肌が立ったというべきか。

この少女はかくも完璧なのに、どこかがおかしい。間違っている。フランス的な数学的な美しさ、黄金比、物理法則の円熟、全ての条件を満たしているのに、それはある見方からすれば途端に醜く見えてしまう、そんな毛虫の蠕動運動のような激しい不安。不定愁訴。訳のわからない神経障害。

なぜ、この少女は笑わないのだ？

なぜか、そう確信できた。単にこの絵の中の少女が笑う表情をしていない、ということではない。少女は「笑わない」に違いない。この少女は実在する。だってあまりに全てがリアルだから。彼女は須らく *tabula rasa* だから。だから、彼女は笑うという行為そのものを知らなすぎた。誰か、彼女に笑うことを教えてあげればいいのに。それとも彼女は忘れてしまったのだろうか。そんな大事な何かを。それとも奪われたのだろうか、渡り鳥たちの嘴によって。

夕日の斜光が彼女をキラキラと映し出す。そして刻は訪れた。「新世界より」が流れ始めた。「新世界」、昨日はとてもそれを懐かしいと感じた。でも、今は？

笑わない少女と「新世界」。ある種の暗号にも似た符号。まるで私の知らないような、別の世界がこの世にはあるのではないだろうか。遠い苗帆畑の向こう、紅黒く染まる山の斜面の向こう、新世界からいったい何がやってきてもおかしくないのではないか。頭の中に外耳道を介して新世界からの音楽が注がれる。私は幼少の甘美な風景を思い浮かべる。しかし、これは実は正しくないかもしれない。新世界からやってきた異星人が私をそう思わせるように洗脳するための音楽か。

ダメだダメだ。もう分らない。

でも確信した。

笑わない少女はきつと現れる。そんなことを確信した。イギリスよりもはるか遠くから彼女はやってくるかもしれない。アンモナイトよりもはるか太古からやってくるかもしれない。そう、あの連峰からすり抜けてこの町にやってくるかもしれない。

私は帰路に就いた。

あたりは暗くなり、誰が歩いているのか全く分からなかった。山はすっかり黒く闇に沈みこみ、白かったイワオヌプリさえ黒く見えた。闇は黒く、全てを飲み込む。昼間の活気だった国道五号線も物言わぬ轟音を立てる自動車に支配されている。闇は決して優しくない。でも、ひよつとしたら、偽りかもだけど、新しい出会いを用意してくれているかもしれない。市川さんに早く会いたい。今日は市川さんにおいしい飲み屋に連れて行ってもらおう約束なのだ。

途中、私はふと花畑を見た。雲間から差し込んだ月光が柔らかく映し出す。

花畑にはインクを落としたように黒い染みが見えた。目を凝らす。あれは黒いバラか？そんなバラ、聞いたこともない。誰かの悪戯に違いないのだ。日の丸のように、ただ一点だけ黒い。日本国旗のような赤いのではなく、真つ黒に見えた。暗いからそう見えるのだろうか。

花畑の丘に誰かが座っている。あれは誰だろう。見たこともない子だ。髪は星屑のように光っている。こんな夜に危ないな。遊ぶには遅すぎるよ。早く帰ってご飯をお食べ、小さなかわいい女

の子。

夜中。また、夢を見る。

私は空高い場所から町を見渡していた。

とても高い場所。生物が入ることの出来ないくらい高い場所から。まるで全てがオモチヤのよう。箱庭の中の出来事のように。町には、夜は誰も歩いていない、ただ一人の少女を除いて。少女はともかわいらしかった。彼女が見えるように月明かりの位置を調整した。自然に伸ばされた、だけれど後から櫛で丁寧に梳かれた小麦色の髪。で麦わら帽子をかぶって一人花畑で花をむしり取っていた。こちら、そんなことしちやだめじゃないか、そう諭した。彼女は声に反応して見上げた。目からは何も読み取れない。じつとこちらを凝視している。ただひたすらに何かを示唆しようとするかのように。あるいは、賢いフクロウが見つめるように。彼女の目は曇りが無い。「笑わない彼女」はあまりに感情という感情を知らないのだ。喜怒哀楽を示すのにだって経験は必要だ。普通はどこかでそれを自然と学ぶ。母親の笑顔か、それとも父親の厳しい顔か。どうにかして、なんとかして、彼女を笑わせてみたい。ほら、これをあげよう。私は彼女のかわりに一本の黒いバラを植えて上げた。黒いバラ、全てを浸食する黒。ブラックホール。光沢の無い、何の知的表情も見いだすことの出来ない黒。本当はあり得ない花。彼女は目を見開いた。まるで初めてのものを見るかのように。あるいは初めての感情と遭遇して戸惑うように。棘が危ないから掴ん

じゃダメだよ。そう優しく論じた。夜闇に黒いバラはなぜだか不思議と合っていた。黒色という偶然の符号の一致、調合の失敗によって引き起こされた偶然の奇跡、異世界からの意味不明な闇の浸食。そうだ、これからは新世界からの贈り物として黒をモチーフにした様々な粗品を少女に届けて上げよう。きつと喜ぶに違いない。もうこの世界はこの少女のものだけにしてあげたかった。だから、他の住民は取り除かないと。私は決意した。この美しい箱庭には私と彼女、たった二人しか必要ない。そしたら、きつと、少女ともっと仲良くなれるに違いないのだから。

私は翌日も朝から、講義をした。

「シガトキシンはシガテラ食中毒の原因物質のひとつであり、非常に強い神経毒を持っている。ある種の藻類がつくり魚類に蓄積される。ポリケチド経路によって合成され、中員環を含む多数のエーテル環が連結した特異な構造を持つ。シガトキシンには数多くの類縁体が存在するが、一般的にシガトキシンとはCTXIBを指す。」

しかし私は正直な話、講義をする気になれなかった。なぜだろうか。分らない。シガトキシンはとても重要な化合物だし、構造式はとても複雑だ。でも今の私には不要なはずだ。質問してくる学生もどうでも良くなった。東さん？が質問しに来てたようだ。適当に答える。

私は町をくまなく歩き回った。何を探しているのだろう。この町は町民同士、顔見知りだ。だから私が一人でぶらついているのはおかしいに違いない。一人？なぜ、私は一人で歩き回っている

のだろう。私はハイエナになってしまったのだろうか。そう、ハイエナは生きた動物を襲うことはない。彼らは死骸を食うために徘徊する。花畑は今日も黒いバラが五、六本咲いていた。

私は歩き回った。なぜ？どうして？分からぬ。ひたすらにがむしやらに、幼少のころを思い出して、虫取り少年だったころの自分を思い出して、ひたすらに走り回った。途端に黒いイワオヌプリがどこにあるか分からなくなった。あの山を忘れてはいけない。あれを忘れてしまえば、あの特徴的な黒光りする石灰石でできたイワオヌプリが東西南北のコンパスのような役割をしている山を忘れてしまえば、私はたちどころに迷子に違いない。

今日ももう、新世界より音楽がやってきた。

新世界からの人々が、魔法使いたちが茜色の空の向こうからやってくる時間だ。羊蹄山を赤く塗りたくる、彼らは危険だ。私は急いで花一会図書館に入った。

花一会図書館。そこは18時にもなれば、子供たちは帰り、ひっそりとした空間になる。代わりに密度の濃いほの暗さと、それを弱弱しく支える微かなランプの明かりが陽炎のように灯り、最後の抵抗を見せていた。戦局は不利に見えた。光はやがて暗闇に負けそうだ。だからだろうか。そう思ってしまったからだろうか。私たちの視覚は本当に網膜に映るすべてのイベントを観測できているのではない。脳は意図的に情報を修正している。だからだろうか。

図書館にはもはや少女の絵は無くなっていったのは。

帰り道、私はいつもの花畑を見た。やっぱり黒いバラで植えつくされていった。少しバランスが悪

いのではないだろうか。もつと色とりどりの花を植えなければ。後で市川に行っておこう。それとも、あの、丘の上にいる、しゃがみ込んだ背中が全て黄色の髪で覆われた少女が植え替えているだろうか。そんなはずはない。それにしても見慣れない少女だな。いったい、どこから来たのだろう。私には白人に見えた。

今日も、夢を見た。

見上げると、少女は丘の上の花畑にいた。太陽の日差しがきつくなりすぎないように曇りにしておいた。少女に話しかけたい。私は丘を駆けた。十五メートルはあるかな。あの子はまだお花をむしっていた。黒いバラはたくさん育ったみたいだ。この間まで一本だけだったのに、何の手入れもしてないはずなのに、ムクムクと成長し、まわりに群生し始めた。黒い花は光を反射することも、虫が寄り付くことも無い。いったいこの黒さにどのような意味があるのだろうか。時に黒さは高貴な畏怖を伴う印にもなる。しかし、この黒さはそのような美しさを持たない。ただ黒さを究めることに専念したかのような色。美しさとは無縁な無骨ささえも感じさせる黒さ。誰からも評価されることのない、自己満足の花。少女は黒い花には手をつけず、白い花、赤い花、黄色い花、紫の花、そういったかわいらしい花を握ってはむしり取った。理由を聞きたい。なぜそんなことをするのかと。なぜ黒いバラだけを大切にしているのかと。走った。あと十メートル。でもなかなかたどり着けない。なぜだろう。また走った。とうとう疲れて大声で叫んでみた。この

世界で、初めて上げられた産声だ。「そこで何をやってるんだーい？」

彼女はこっちに振り向いた。

良かった。とりあえず気付いてくれたみたいだ。

彼女はフフと微笑んだ気がした。ようやく、彼女が表情らしきものを見せてくれたのではないか。むしつた花束を投げ捨てて、走った。

——追いかけてこしようよ。

そう言っているように聞こえた。あるいは風の音？彼女は走り出した。大丈夫すぐに追いつくはずだ。

私はあの子の背中を追いかけた。体格差を考慮してすぐに追いつくはずなのに、なぜだろう、ちつとも差は縮まらない。もつと走らねば。とたん山の端から日は上ってきた。眩しかった。

翌日、私は茉耶がいないことに気付いた。いつからいなくなったのか、さっぱり分からない。ころうじで今日が滞在三日目であることが分かった。今日が特別講義の最終回だからだ。

でも、講義なんてどうでも良くなった。なぜだろうか？

そうだ、そんなの決まってる。茉耶がいないからだ。茉耶が私の隣で朝起こしてくれないと私は寝坊してしまう。すると講義に行けなくなる。それは困る。しかし、仕事は仕事だ。今日も講義に行く。北海道の夏は涼しいな。これなら今日も張り切つて最先端の研究を詳細まで語りつくせ

るに違いない。

「二〇〇一年に日本人の研究グループによって、シガトキシンの全合成が世界で初めて報告された。第2世代型グラブス触媒を用いたオレフィンメタセシスによる閉環反応を鍵反応とし、13個の連結したエーテル環構造を効率的に合成する手法を確立したのは特筆すべき点だ。」

学生たちは全く質問しに来なかった。なんて不真面目な学生たちなのだろう。こんなことも分からないなんて。

「先生、ちょっと今日のところ教えてほしいんですけど」

「東さんか。いや。。。すまない、今日はちょっと用事があったね、ちょっと」

「どんな？」

「えーっとなんだったかな」

「先生？」

「あ、そうそう、うちの茉耶がいなくなったんだよ。。。」

「茉耶さんってあの彼女さんのことですよね。。。それって大変なことじゃないですか？早く探しに行きましょう。私も一緒に行きます。行くあてはあるんですか？」

「うーん確か初日にシヤケ武士のショーを見に行くと言っていたような」

「じゃあ、こつちですね、行きましょう」そう言っただけで東は私の手を掴んで「道に迷うといけませ

んから」と、引つ張つていった。

結局、茉耶はどこにもいなかった。そうではない、私自身、茉耶の容姿が思い出せなくなっていた。なぜだろう、いったいいつから彼女はなくなっていたのだろう。分からない。何が何だか分からない。東は「先生、何だか変ですよ。。。？」と言われてしまう始末。

「あ、そうだ、先生。先生はスケッチが得意なんですよね？ちよつと描いてみてくださいよ、茉耶さんの似顔絵。なんかあるじゃないですか、賞金首の顔のチラシみたいに、別に海賊王になるわけじゃないと思いますけど。」

私は、描こうと思った。最初は戸惑った。たぶん、描くことによつて本質に触れてしまう恐怖。私はそれを悟った。だけど、もう明らかにしたくなつた。こんな闇雲ないたちごつこのゲームなんてまっぴらごめん。もう早くあきらめたい。倫理から解放されたい。もう、パンドラの箱を開錠したい。だから私は東の言うとおりに描いた。「茉耶」と呼ばれるその女性を。辺りは暗くなり、新世界からの音楽が轟音を鳴らしながら、私の耳に甘くささやきかけた。

「えー？先生、この人が茉耶さんなんですか？」

——だから、

「ちよつと童顔すぎないですかー(笑)それとも先生の画力が無いからですか？」

——要するに、

「先生。。。茉耶さんって日本人なん、ですよ、ね？」

——なぜだか、分からないが。

「茉耶さんがこんな外国の少女なわけ、無いですよね。。。私、あの、先生、ごめんなさい、私も帰ります。。。」

そう。最初から、茉耶なんてどうでも良かった。

私は早くあの笑わない少女に会いたい。会いたくてたまらない。

いや、結局、茉耶とはあの笑わない少女そのものだったのだろう。茉耶なんて最初から居なかったに違いないのだから。

今日もイワオヌプリが黒い。

花畑も真つ黒だなあ。後で市川さんに言っておかないと。

その晩、私は最後の夢を見た。

美しい少女と私はいた。彼女は笑わない。なぜだい？私は問いかけると、少女は私をスツと見つめてきた。この段になり分かったが、彼女の眼は全くもって青かった。ラピスラズリ。その青い目に薄暗い月の光が反射し、彼女の瞳孔には左右対称の私の顔が映る。そしてその顔には困ったような、何かに赦しを請うような、だけど久しぶりに会うことのできる懐かしさと郷愁を同居させた負け犬のような私の瞳孔がポツリと二つある。その向こう側にはまた少女の瞳孔があつてお

互いの網膜像が無限回廊をなしているように感じる。彼女を見つめると、私は自分とあたかも向き合っているような気がした。今、初めて会うのに、もう何年も付き添ったことがあるかのような安心感がある。同時に、それゆえに、というべきか、私の全てが見通されているような不安定感があった。少女と私は花畑で花を摘んだ。全部黒いバラだったから、より黒々しいバラを選んで、少女に渡そうと思った。本当は自分でもこの黒いバラの正体を分かっているのではないか。本当にこれは「黒い」バラなのか。私が少女に贈るためにバラを抜いてないのではないか。本当は自分のためなのではないか。いや、そんなはずはない。これは単なる自己満足ではない。立派な奉仕活動なのだ。チクリ。棘が指に刺さった。ああ、痛い。バラの花びらは赤く染まる。染み渡る紅色は黒を基調としたバラにはとてもよく映えた。赤色が徐々にバラを覆い尽くすのを私は呆然と見届けた。棘の先端からムズムズと這うように茎を上下に伝い、根の白く貧弱な糸状部も深紅色、花は中央部分からまるで、赤いバラが咲き始め、置き換わるように黒を滲ませた。赤いバラ。なんて綺麗なんだろう。あの少女への贈り物にぴったりだ。

見渡すと、少女はどこにもいなかった。私は探す旅に出た。

日差しはもう南中から降り注ぎとても暑かった。でも、私は少女から離れるのが怖かった。走った。走った。走った。ひたすらに、ただひたすらに走り続けた。国道五号線。ひたすらに直線的に続く道、永遠に目的にたどり着くことのない、円環になった農村特有の連続的景色。永遠の世界、春夏秋冬が終わるとまた春が来て、だから円環するという必然性。直線的なのに円環的。と

にかく、走る、私はあの笑わない少女を笑わせたい。手には鮮血色のバラ。世界にたった一つの真紅のバラ。これを見せれば少女は微笑んでくれるのだろうか。

私は乱れた記憶の濁流を修正していく。流れはやがて清流となり入り江の開口部で一つの焦点を結んだ。少女は私の知っている最も親しい存在。私が唯一必要とした存在。黒いバラは贖罪の象徴。だから黒くて穢れたこの世界から黒いバラを浄化したかった。私はただただ、彼女に赦しを請いたかったのかもしれない。私はこの「笑わなくなった」少女に救い出された。もうこの物語もおしまいだ。

さつきから何時間もずっと新世界からの音楽が流れ続けている。なぜだろう。きっとここはもう新世界なのだ。だってそうだろう、私は箱庭の中で今走り回っているのだから。随分探し回ったものなあ。

見上げるとイワオヌプリだった。

イワオヌプリ、真つ白な大きな山。白いのそれが石灰岩でできているから。イワオヌプリは黒くないのだ。なぜ、今まで黒いと思っていたのだろうか。

そう、イワオヌプリは今の今まで一度も黒くなったことなど無かったのに。。。

目の前が眩しくなった。

ようやく戻るときが来たのだ。だからさようなら。美しい世界。そして息苦しくもリアルな現実

に戻る時が来たのだ。

そう、私には果たさなくてはならない責務がある。

「——間もなく、蘭越、蘭越です。お降りの方は一番先頭の扉からお降りください」
現実に戻された。そう、夢は終わったのだ。

隣の席には絵描き道具が置かれていた。

そうだ、仕事のため蘭越町に来たのだ。重たい眼をこすり、ようやく頭が回り始めた。

——どうしてるかな、マリア。

ふと、そんな言葉を呟いた。

【エピソード】

「宇佐美さん、今日もお出かけしましょうね」

これはいつもの日課。今日も付添いの看護師さんの桔梗さんが一緒にいてくれる。フフ、桔梗さ

ん、今日はいつともよりも気合の入ったネイルアートなの。たぶん今夜はデートなのかしら。

桔梗さんは毎朝、こうして動けない私を車いすに乗せて散歩するのが通例だ。私は「あの事件」がきっかけで身体が動かなくなり、表情さえ作ることができなくなった。実際には先天性のものだったのかもしれない、と言われている。小学校のころは担任の先生から「マリアちゃん的笑顔つてとってもステキ」つていつも言われてたっけ。自慢の長いブロンドのサラサラ髪を自分でいじることも出来なくなった。母方が白人だったために兄の圭吾は父親譲りの日本人だけどちよつと外人風の格好いい、妹の私は金色の髪に青い瞳という母方の性質を強く受け継いだ。兄弟そろつて小学校、中学校、高校と人気ものだった。私なんかラブレター？とかナンパとかどれくらい誘われたか分からないくらい。兄の圭吾もたぶんそう。

でも、全部変わってしまった。私はあの忌まわしい1年前の事件から身動き一つできなくなった。それはとても悲しいこと。でも、もつと気がかりなのは兄の圭吾のほう。彼も精神的なショックが激しかったらしくて、たまに白昼夢を見るようになってしまった。以来、私たちは夢の中でなら会話できるようになった。私は現実世界では話すことができない。兄さんは現実世界と夢の世界が判別できない。そんな私たち、もはや正常と言えない私たちの唯一のコミュニケーション方法は夢の世界での邂逅だけ。たまに夢の世界から帰ることができなくなった兄さんを助けるのが私の仕事。兄さんはきつと私が笑わなくなったのは自分のせいだと感じている。兄さんは私からの赦しが欲しいに違いない。そうでなければ、兄さんは一生私という十字架を背負って生きてい

かなくてはならない。そうであつてはならない。この間もとある北海道内の町への旅行中にちょっとした発作を起こしたみたいだから、助けてあげた。そんな不思議な兄妹愛があつてもいいじゃないの。なんの事件が1年前にあつたか、だつて？今は内緒。そのお話はまたの機会にしましょうか。いつか、兄さんが救われるその時まで、待ちましようか。

「今日も良いお天気ですよ、マリアちゃん」

桔梗さんの黒い髪が強い日差しを反射して白い輪っかを作っていた。桔梗さんの大きな影が私の身体を覆っているためかそんなに暑くない。大きくて優しい影。おさげで清楚な桔梗さんは華奢で梢のような手足をしているのに、どこにそんな力強さを秘めているのだろうか。彼女は自分の仕事を愛しているに違いないのかもしれない。私もこんな人になつてみたい。

ああ、神様。もし許されるのなら彼女みたいに人を救う仕事に就きたい。四肢を自由に動かし、人の命を救うためにこの身体を使いたい。私を今一度お許してください、神様。

「そろそろ丘の上につきますよ」

私は毎朝の日課でマリアちゃんを病院の裏にある丘の上まで連れて行っている。かわいそうなマリアちゃん、身体が原因不明の病に侵されて自由が利かなくなつちやつたなんて。

この病院は札幌から随分離れた位置にある。私自身は札幌生まれで市外へはあまり行つたことがなかった。だけど、ここには綺麗なラベンダーの丘がある。患者さんはこの景色を見るだけでヒ

ーリング効果があるのではないか、そう考えざるを得ない。大学で看護学を学んでからというものの、患者に寄り添い、患者個人個人の気持ちを大事にするように心掛けてきた。先生方の処方される薬は一般的でどんな患者さんにも同じものばかりだけど、私の仕事は違う。そう思つてこの散歩も自分から率先して行つてゐる。私は新米だし技術的な面では何にも役に立たないけど、出来ることもある。私の初めての受け持ちのマリアちゃんがどうかよくなりますように、せめてもの祈りを捧げるために。

ワンワン！

遠くから鳴き声が聞こえてきた。うちの病院で飼つてゐるラブラドルレトリバーだ。ビクトリアだわ、と私は思わずつぶやく。マリアは顔を動かさないから分からないかも知れど、音はしっかりと聞こえてゐるはず。犬はとても不思議な存在だ。どんなに心が弱つていても私たちを賭け無しで信用してくれる。人間相手なら警戒してしまう我々ヒトはイヌにはとても素直な気持ちで居続けられるような気がした。

ビクトリアも数多くの患者さんの気持ちを救つてきた。もちろん彼女はそんなことを知る由もない。ただ自分にとつて当たり前のことをしているだけだから。でも、だからこそ、そんな素直な気持ちだから人を癒す力があるのかもしれない。ビクトリアがマリアちゃんに近づく。

ペロリ、と彼女の指先を舐めた。

マリアちゃんの指先はピクリと動く。

ある種の期待を感じた。それは潮騒に似たざわめき。太古からの鼓動。躍動感。何かが始まるといふ予兆。

なぜだが、分からないけれど。日差しのせいかもしれない。

ビクトリアの背中が輝いていて、神の遣いに見えた。

私は初めて目の前の少女のか細い声を聞いた。

「私、兄さんに会いにいきます。」

「笑わない少女」

発行 平成二六年年一月一日

著者 尾崎孝爾

出版 らんこし作家デビュー・プロジェクト